長崎新聞掲載／全3段（W378×H99）

続・奇跡はある（02）

徳永　耕一

題字・林田八郎

木下君と割烹"きたさと"

木下夫妻との会食の場所は、京都祇園の「きたさと」という瀟洒な割烹だった。

私は、静かな佇まいを見せる祇園の路地を、足取りも軽く目的の店へと急いだ。「きたさと」では、出される京料理に舌鼓を打ちながら、木下夫妻と積もる話に花を咲かせた。

「とっくん、よう頑張ったな」と、木下君は今までの私の歩みや自分史出版を我が事のように喜んでくれた。

ところでその店「きたさと」だが、私の故郷熊本県小国町出身の人が経営する店で、偶然にも木下君が見つけたのだ。

「とっくん、君の故郷の小国町出身の人が経営している割烹が、我が家の近くにあるよ。北里さんという人が経営者だよ」

その店は、祇園に出店する前は、木下君の医院兼住まいがある比叡山の団地の中にあって、たまたま木下君が見つけて、行きつけになっていたのだ。

九州の熊本の山奥の小さな町から出た人が、たまたま広い日本で京都の比叡山を選んでお店を出して、そのお店を私の親友の木下君が知り、そして同郷の私が知ったという流れは、「奇跡はある」とまでは言わないが、縁の不思議さを感じずにはいられない。

北里さんは、昔小国町一帯の総庄屋の家柄で、有名な北里柴三郎の本家筋にも当たることが後でわかった。

その日は、達成感に満ちた気持ちで、当社の京都ホテル「ジスコホテル京都御所西」で深い眠りについた。

翌日は堺市に立ち寄って、大阪府立三国ヶ丘高校の同級生の金子君や北さんたちと久しぶりの再会を果たし、旧交を温めた。

ところで、京都のホテルのことだが、二〇一八年秋、突然SMBC信託銀行の久家さんから連絡が入った。

「突然ですが、京都のホテルを買いませんか」

それまで北九州や広島など、何度か物件の紹介はいただいていたが、いずれもピンと来ず、見送っていた。

ところが今回、「京都」と聞いた時、私の五感は敏感に反応した。

母が京都の隣りの滋賀県出身でもあり、私も、一九七三年頃から六年間ほど大津市に住んでいた。その間、一九七四年には京都で妻と見合いをして、一九七五年に結ばれた。

独身時代、よく大津から大阪への通勤の帰りに、金もないのに京都の夜の街をぶらついたものだ。その頃、路地の小料理屋の灯りはとても眩しく、羨ましかった。

京都は、親友の木下君が住んでいる所でもあり、また、自分史「奇跡はある」を書くきっかけにもなった、長女のアメリカ留学時のホームステイ先のジェラード夫妻との出会いの場でもある。

そしてさらに、次のようにも思った。

「京都は、日本の古都であり、長く天皇が住む首都でもあった。そこに、しかも京都御所のすぐそばに、ホテルを持つことは、望外のステータスでもあり、会社のイメージアップにもなるのではないだろうか」

〈次回10月1日掲載予定〉

木下夫婦との一枚

Jisco Group
ジスコ不動産株式会社
ジスコホテル株式会社
ジスコ子ども支援株式会社
長崎県諫早市永昌町4-26
TEL 0957-27-1112　FAX 0957-26-1777